# 疑似体験を通した障害理解

## ーコミュニケーションの障害を中心にー

庄司　和史（信州大学　学術研究院総合人間科学系）

### 1. 子供の障害の特徴

子供の障害は、環境への働きかけや把握に様々な形で困難をもたらしている。そのため、個々の子供の発達に大きな影響を及ぼす。発達は、その特徴によっていくつかの領域に分類され、発達評価もその領域ごとに行われることが多い。しかし、子供の様々な能力の発達は、領域ごとに分かれて進むのではなく、全体的で総合的なものである。つまり、発達評価は、障害という部分の問題の詳細を科学的に捉えると共に、最終的には全体発達を見るものでなければならない。このことは、一つの領域における顕著な障害が他の領域にも影響し、結果的に全体発達に影響を与えること、そして、ある一つの領域の障害は他の障害のない領域で補うことが可能であることを意味している。

### 2. 人間関係の問題として現れる障害

例えば、視覚障害があると、視覚的な情報を中心とした情報不足が生じ、環境把握の困難をもたらす。そのことにより自立した運動が制限されたり、身近な人との情報共有が難しくなったりする。こうしたことが幼い段階から起きていると、定型発達では自然に蓄積される親子間の共感体験等が制限され、それは、人間関係の基本的な発達に影響を与える。聴覚障害でも同様のことが起こる。また、知的障害や発達凸凹とも言われる発達障害においても認知の遅れや歪み、感覚的な問題のため、共感体験が積まれないという問題が起こりやすくなる。つまり、人間関係の発達の問題は、障害部位が異なり、障害特性が大きく異なっている別々の障害で共通して起こっている問題だと言うことができる。つまり、障害による困難の多くは人間関係の中で生じている。コミュニケーションの中で起こる困難を知ることは、すべての障害の理解につながる方略である。

### 3. 障害の疑似体験

障害の疑似体験は、ある障害の一部の状態を意図的に作り、実施する活動で、このことによって、①該当する障害の特徴を理解する、②その障害によって起こる様々な場面での困難状況を想像する、③困難に遭遇した障害のある人の心理状況を想像する、④他の障害についての理解に応用する、⑤自分自身の感じ方だけではなく一緒に体験した人の感じ方も知る、ということが期待できる。疑似体験と行う場合、リーダーはまず参加者に、固定観念にとらわれないこと、自分の心理状況に向き合うこと、障害のある人の立場に立って考えることを促す。その上で個々の活動の目的や手順をはっきり示すようにする。疑似体験活動はそれぞれの役割を演じるロールプレイングの一つであるので、参加者はリーダーの指示したとおりに「役を演じる」つもりで参加することが受容である。体験活動後には、参加者の感想や意見を交流する（シェアリング）。シェアリングは疑似体験活動で最も重要な手順で、これによって個々の体験活動が拡充する。リーダーは、全体を観察し、タイミング良くリードする。個々の参加者の心理的な状態を可能な限り受け止めるように努める。正直に自分の心理的な状態に向き合っている参加者からはリーダーの思いと異なった意見

や障害に対するネガティブな考えが出される場合もある。どのような発言も肯定的に受け止め、解説をしすぎることによって参加者の感想を誘導することがないように留意する。疑似体験で扱われる困難は、あくまでも障害の一側面に過ぎない。参加者の様々な感想や意見を交流することによって、「結論を出さない」という流れを作り出していくことも重要になる。

## 4. 主な疑似体験活動

（1）ピーチク・パーチク

使える言葉を制限することによるコミュニケーションの問題を扱う体験活動である。話し手と聞き手に分かれ、話し手の使用できる言葉を「ピーチク」「パーチク」の２語として指定される内容を聞き手に伝えるようにする。身振りや指さしを交えた活動とそれらも使用しない活動を行うと効果的である。

（2）アイマスクによる話し合い

８人ほどのグループで２～３人ずつ順にアイマスクを着用しテーマに沿った話し合いを行う。コミュニケーションでは言葉以外の視覚的な要素も影響することを扱う。話し合いだけではなく、ジャンケンなどのゲームを行うもの効果的である。

（3）ヘッドフォンによる難聴体験

４人グループで、一人ずつ順に耳栓と CD 再生機につながれたヘッドフォンを装着し「難聴」役になる。ヘッドフォンからはノイズを流し、周囲の会話音が聞こえない程度にボリューム調整する。そのまま、４人で話し合いを行う。「難聴」役を無視して話を進めたり、交えて一緒に話をしたりする。

## 5. 成果と課題

免許状更新講習でも、教育センター等での研修でも、実際には座学の講義形式が多いため、体験活動を連続して行う本講習は、分かりやすいという感想を得ている。多くの障害のない人は、障害＝困難という素朴概念を持っているが、体験を通して実感することは必ずしも困難性ばかりではない。例えば上記の「ピーチク・パーチク」においては、言葉の使用に制限を加えているにもかかわらず、意思がうまく伝わるということも多く起こる。活動を通して、障害があってもコミュニケーションは可能だということが実感されていく。このことが大きな成果である。

一方、講習で行う場合、時間が制限されるため、間を置かず次々と活動が展開される。いわば集中学習方式であるため、その場ではよく分かったつもりになるがそれぞれの実践場面でどのように活かすかは、やはり個々の参加者の力によるところが大きい。